建長寺に見る古都鎌倉における宗教的谷戸空間の 景観構造に関する研究

A Study of the Landscape Structure of the Religious Valley, Kenchoji in the Old Capital, Kamakura

高橋 睦* 石川 幹子**

Chika TAKAHASHI Mikiko ISHIKAWA

Abstract : The purpose of this study is to bring to light the landscape structure of the Yato in Kamakura. It is a fortress city surrounded by hills on the three sides. The hills have various Yato which form and characterize the original landscape of Kamakura. Of the Yato identified on the map, I selected Kenchoji Yato for the object area as the case study of the characteristic religious Yato. Following a study on the relation between the historical transition of Kenchoji and Yato, I attempted to analyze the landscape structure of the Kenchoji Yato from the standpoint of the plane-level landscape and the sequence landscape along the axis of Yato. To clarify the plane-level landscape, I made an inclination classification figure map. To clarify the sequence of landscape, I clarified the landscape structure by taking photos of the landscape and find out the area ratio of each landscape element. The above analysis led me to conclude that there were six characteristics with respect to the landscape structure of Kenchoji Yato.

Keywords: Yato, Kenchoji, Landscape structure, Religious area

キーワード: 谷戸, 建長寺, 景観構造, 宗教的空間

1. 研究の背景と目的

これからのまちづくりにおいて、残された歴史的環境をどのように評価し、保全していくかは重要な課題である。そのためには、建築単体ではなく、周辺環境を含んだランドスケープ構造を明らかにすることが必要であり、分析手法の確立が必要とされている。

東京近郊の歴史都市である鎌倉は、南を海、三方を丘陵に囲まれた城塞都市である。鎌倉を囲む丘陵は、大小様々な谷戸という入り組んだ地形によって構成されている。谷戸は鎌倉の特徴である古都の景観を構成しているが、地形を無視した開発や谷底部の宅地化の広がりにより、多くの谷戸が本来の風景を失ってしまっている。このように、変わりゆく社会環境の中で、古都としての歴史的環境をどのように保全し、継承していくかが課題となっている。

これまで、街路空間の景観構造分析には、竹内ら¹⁾によるものが、参道空間に関する研究には、船越ら²⁾による空間の物理的構成要素と心理的作用に関する一連の研究がある。鎌倉の歴史的環境に関する研究としては、片山ら^{3) 4) 5)}による建築高度規制に対する計画手法の確立を目指しているものがある。社寺については、鎌倉市文化財総合目録編さん委員会⁶⁾によって文化財指定されている建築が、鎌倉市史編纂委員会⁷⁾によって各社寺の史実が、それぞれまとめられている。鎌倉の自然環境については大澤ら⁸⁾による鎌倉市を対象としたビオトープマップ作成手法に関する研究がある。歴史的環境を、地形・景観構造など複合的な観点から分析したものとしては、高橋ら⁹⁾による円覚寺を対象としたものがある。

鎌倉における谷戸空間の特色は、宅地、宗教的空間が混在していることにある。本論文の分析の項で明らかにするが、鎌倉には社寺を有する谷戸が66あり、その中で円覚寺は、宗教空間が谷戸谷底部の75%を占める唯一例外的な谷戸である。そこで本研究は、鎌倉の谷戸の多くを占める社寺と宅地が混在している谷戸の景観構造を明らかにすることを目的とし、建長寺の谷戸を対象として研究を行うこととした。建長寺は、日本初の純粋な禅の専門道場であり¹⁰⁾、後の禅宗寺院造営の先駆的な例と考えられている。このことより、先行研究の円覚寺の谷戸と対比させることで、

宗教的谷戸空間の特質を相対化し、比較検討することが可能になると考えられる。

2. 研究の方法

(1) 対象地

建長寺は、臨済宗建長寺派の大本山であり、鎌倉五山第一位に指定されている名刹である。鎌倉市中心部から巨福呂坂を過ぎた北東側に位置し、北西-南東向きから南西-北東向きに折れ曲がった谷戸の内部が、伽藍と塔頭によって構成される寺空間に占有されている。建長寺に関する調査研究としては、滝澤・宮田^{11) 12)}によって発掘調査報告と伽藍の変遷の考察がなされている。この調査を基に、三浦¹³⁾によって建長寺庭園の江戸期の作庭過程が、宮内・田畑¹⁴⁾によって遺存植物体の分析に基づく植栽について考察されている。また、鎌倉期の建長寺の伽藍計画について、櫻井¹⁵⁾が建長寺伽藍指図について検討を行っている。しかし、これまで建長寺の景観構造を内部に展開されている歴史・宗教・自然の関係から詳細に分析したものはない。以上より、建長寺の谷戸の研究を行うことは、宗教的谷戸空間の景観構造をまとめる上で意義があると考えられる。

(2) 研究方法

(i) 谷戸の抽出

まず、鎌倉市における谷戸を抽出した。GIS(地理情報システム; Arc View 8.2 ESRI社)のHydrology Modelingを使用し、非集水域を除く市域から、集水面積の閾値を10haとして小流域を抽出した(図-1)。そして、土地利用を基に分類を行い、社寺を有する谷戸の中から建長寺の谷戸を抽出した。¹⁶⁾

(ii) 景観構造分析

次に、建長寺の谷戸の景観構造分析を行った。まず、文献や古絵図から建長寺の歴史的変遷と谷戸との関係を明らかにした。そして、現在の景観構造を、平面とシーケンス景観から分析した。

平面分析では、建長寺の谷戸の傾斜区分図を作成し、地形の特徴と宗教空間との関連性を明らかにした。シーケンス景観分析には静止画を使い、景観構成要素を抽出してその面積比を分析す

*慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 **慶應義塾大学環境情報学部

図-1 対象地－建長寺の谷戸

ることで景観構造の抽出を試みた。さらに、古絵図を基に、鎌倉期の景観構造を明らかにすることにより、現在との比較を試みた。

3. 分析

(1) 谷戸の類型化

現在鎌倉には、社寺を有する 10ha 小流域が、旧鎌倉地域を中心に 66 ある¹⁷⁾。そこで、宗教的な谷戸の特徴を明らかにするために、社寺を有する谷戸を、谷底部の土地利用によって再類型した。その結果、社寺を有する谷戸のうち、A.社寺地が 75%以上占めるものが 1 箇所、B.社寺地が 75%以下 25%以上占めるものが 12 箇所、C.社寺地が 25%以下のものが 53 箇所抽出された(表-1)。

A に分類された谷戸は円覚寺のみであり、先行研究で景観構造を明らかにしている。そこで本研究は、B の谷戸の中から、円覚寺と同じ禅宗寺院で、谷戸の形状が最も良く継承されている建長寺の谷戸を対象地として、研究を行うこととした。

表-1 鎌倉における社寺を有する谷戸の類型化

谷底部の土地利用の割合	谷戸数	代表的な社寺
A 社寺地が 75%以上占めるもの	1	円覚寺
B 社寺地が 25%以上 75%以下占めるもの	12	建長寺、浄妙寺
C 社寺地が 25%以下のもの	53	明月院、高德院大仏、海蔵寺

(2) 景観構造分析

(i) 歴史の変遷

まず、建長寺の歴史の変遷を分析した。資料には、「鎌倉市史社寺篇」¹⁸⁾「史蹟建長寺境内」¹⁹⁾「建長寺」²⁰⁾と、「建長寺伽藍指図」(1331 年推定)²¹⁾「建長寺境内絵図」(1678 年寄進)²²⁾の二つの絵図を使用した。これらを基に、建長寺の構造の変遷を図化した(図-2)。

建長寺では、1253 年の仏殿落慶供養を皮切りに、約 20 年余りかけて次々と中心伽藍が整備されていった。1279 年には開山蘭溪道隆の塔所である西来庵が開かれた。山の中腹に位置し、周辺の地形が大きく変化していることから、大規模な造成工事が行われたことがわかる。その後、建長寺は幾度も被災するが、その都度大規模な復興が行われた。そして、谷戸中部の広い谷底部に北東-南西の軸を持つ壮麗な七堂伽藍が整備され、次々と塔頭が創建された。建長寺では、1500 年までに確認されているだけで 49 院の塔頭が創建されている。その結果谷戸内の造成が進み、現在のような地形になった。

しかし、1414 年 12 月に応永の大火が起きると、その後も続く被災に対し復興が追いつかなくなり、建長寺は徐々に衰退していく。主要伽藍は、三門や法堂などの単体の再建が行われるのみとなってしまった。一方、塔頭は 1500 年までに新たに 8 院が開かれている。このように、谷戸全体の塔頭開発が継続する一方、中心伽藍は衰退し、中心性が薄れていった。江戸時代に入ると幕府の庇護の下、三門・仏殿・方丈と次々に復興され、主要伽藍が揃えられた。書院の裏にある庭園は、規模が縮小され現在の大きさ

図-2 建長寺の土地利用と伽藍の変遷

になった²³⁾。しかし、明治に入ると、敷地内に様々なものが混在するようになる。外門の外街道沿いは、土地の細分化と開発が進み、宅地と畑が混在するようになった。また、境内内の塔頭跡地の土地も分割され、1922 年には総門脇に建長寺が運営する鎌倉中学校が建てられ、奥の小さな谷戸にはグラウンドが造成された。その後、関東大震災で壊滅的な被害を受けるが、ほとんどの主要伽藍が移築・再建され、宅地化も進んだ。創建から約 750 年経ち、寺空間に様々な施設が見られる現在は、混在期と言える。

以上より、建長寺では創建から 15 世紀までにすべての塔頭が創建されたが、開発されたエリアが時代ごとに変化していることがわかった。塔頭の開発は谷戸の北部と西来庵の谷戸内から行われた。14 世紀前期までに、11 院の塔頭が谷戸の北部と東側にある西来庵の谷戸に創建された。室町時代に入りさらに塔頭が増えると、塔頭の立地に法則性が見られなくなり、北西-南東の門前の街道沿いと派生するひだの内部、谷戸の北部などの造成が進んだ。1414 年以降は、塔頭が存在しているひだのさらに奥まで、平場の造成が行われている。

谷戸の東側に位置する高山は、建長寺で最初に塔頭が建てられた場所である。開山蘭溪道隆の西来庵であり、高山は建長寺の境致に指定されている²⁴⁾。また、西来庵の約 7 年後に創建されたのは、円覚寺の開山である無学祖元の正統庵であり、七堂伽藍の真北にある奥の空間に開かれている(1334 年に円覚寺に移転、現在は正統院が建つ)。谷戸の北部の奥の空間は、建長寺の奥の院とされる浄地の谷や処刑場であった地獄谷があり、華嚴塔も建てられている。外門は、下界と宗教空間を隔てる門であり、下馬をする場所である。北西-南東の谷戸部は外門の外側であり、寺域外である。街道沿いには他寺院・民家なども存在していることから、当時の建長寺の境界があいまいだったのではないかと推察される。

(ii) 景観構造分析① 平面構造

建長寺の谷戸の規模は寺域が約 53,870 平方メートル、南北約 730m、東西約 1,330m の大きさである。谷戸中部で北西-南東から勝上嶺に向かって南西-北東へと折れ曲がっている。

まず、現在の建長寺の谷戸の地形を把握するために、建長寺の傾斜区分図を、GIS を用いて作成した。傾斜区分は、3 度未満、3 度以上 8 度未満、8 度以上 15 度未満、15 度以上 30 度未満、30 度以上の 5 種に分けた。²⁵⁾ その結果より、建長寺の谷戸は 0 度-8 度の平地と緩斜面によって構成されている幅の広い谷底部と、15 度以上の急斜面によって構成されていることがわかった。谷

図-3 建長寺傾斜区分図

底部の幅を測ると、県道沿いの北西-南東向きの谷戸部は約 60m~105m、主要伽藍のある南西-北東向きの谷戸部は約 35m~60mだった。

次に、傾斜区分図と伽藍・塔頭の配置図を重ね合わせ、地形と宗教空間との関連性をみた(図-3)。その結果、北西-南東に伸びる伽藍が配置されていない谷底部、南西-北東に伸びる主要な伽藍が配置されている谷底部、谷底部から分岐するひだの3つに分けられることがわかった。各ひだは平場と周りを囲む急斜面によって構成されており、8度以上の斜面で谷底部と分けられていることがわかった。

南西-北東に伸びる谷底部は、平坦面と緩斜面によって構成されている。特に、主要伽藍である総門・三門・法堂は、0度-3度の平坦面に建てられている。傾斜がほとんどなく幅が35m~60mと非常に広い。主要な伽藍は一直線上ではなく、総門-三門、三門-法堂、方丈と3つの軸を使って配置されているが、これは地形に合わせたためと考えられる。そして、緩斜面を隔てて書院が建てられている。書院は僧の生活空間であり、ここが境界線となって、谷戸の北部の奥の空間が展開している。奥の空間は、複数のひだによって構成され、多くの塔頭が創建されてきた空間である。分岐するひだは、谷底部から緩斜面を境にし、平場と崖地もしくは極急斜面により囲まれた小空間によって構成されている。塔頭が創建されるごとに造成が行われ、平場とそれを囲む急斜面によって構成される地形ユニットが作られたと考えられる。このように、各塔頭は街道・境内というパブリックスペースとの境界を、斜面を利用することによって明確にし、急斜面に囲まれたひだごとにプライベートな空間を作りあげているのである。

以上より、建長寺の谷戸は、谷戸中腹の広く平坦な谷底地に禅寺の象徴空間である七堂伽藍を配置し、書院を境界とした奥の空間と門前の街道から派生するひだには、小空間によるプライベートな空間がそれぞれ確立されていることがわかった。

(iii) 景観構成分析② シークエンス景観

①方法

次に、宗教的空間の景観構造を明らかにするために、参道のシークエンス景観を抽出した。これは、伽藍配置が人の視覚という点からどのような意図から作られ、どのような効果がもたらされているか分析するためである。調査場所は、谷底低地にある外門前から仏殿までのメインの参道(ルートA:約193m)と三門横から書院前の唐門まで(ルートB:約104m)、奥の空間である副参道(ルートC:約234m)、の3箇所で行った(図-4)。

調査は、2003年12月、2004年9月と10月の晴れた日に行い、レンズサイズ35mmのデジタルカメラで、レンズを人間の視線の高さ(約150cm)に固定し、参道の敷石に並行にレンズを向け、参道に沿って2mごとに写真を撮った。外門前から仏殿まで計99枚、山門横から唐門まで計51枚、副参道の入り口から正統院入り口まで63枚と正統院入り口から半僧坊・回春院の分岐点

図-4 シークエンス景観分析の調査エリア

表-2 景観構成要素

自然環境要素	空		
	水		
	緑	近景の緑（主に常緑樹・背景の緑）	中・遠景の緑
		近景の緑	
人工要素	植栽（カエデ・サクラ・イチョウ）		
	歴史的建造物（建築・石碑）		
	柵・家屋		
	崖・人工斜面		
	道路	階段	
		参道（石畳・土・白砂）	
		舗装道路（コンクリート）	
人工物（景観阻害要素）			

まで58枚 計121枚であった。その中から、景が変化したと思われるポイントの写真をルートAでは54枚、ルートBでは18枚、ルートCでは28枚を抽出した。そして、写真に写っている景観構成要素を、自然環境要素と人工要素から計12種類に分類した。緑は、背景の緑と、場のポイントとなる植栽を分けて分類した。さらに、背景の緑は近景と中遠景に分けた(表-2)。そして、画像処理ソフトを用い、写真をグリッドで391マスに分けて占有している要素を塗り分け、画像に対する景観要素の面積比率を求めた。そして、まずその中から特徴的な要素を抽出し、X軸に参道の距離をとり、折れ線グラフにしてその変化を見た。さらに、画面の景観要素の構成を比較することで、画面構成にどのような特徴があるかを見た。また、ルートAについては伽藍指図と比較することにより、景観構造の変化を見た。

②分析結果

(ルートA) 谷底部:外門から仏殿まで

まず、ルートAについて分析を行った。景観構成要素を見ると、12項目のうち空・歴史的建造物・参道が、常に高い割合を示した。近景の緑・植栽・中遠景の緑は一部で高い割合を示した。階段はほとんど見られなかった。

次に、常に高い割合・一部で高い割合を示した6項目を見てみると、空・歴史的建造物・近景の緑・植栽で、特に割合が高くなる箇所が複数あった。それを折れ線グラフにして重ねると、景観構成が、外部-外門、外門-総門、総門-三門、三門-仏殿と連続する4つのエリアに分けられた(図-5)。

次に、各エリアの画面構成を比較してみると、総門-三門、三門-仏殿で特徴的な画面構成となっていることがわかった。現在総門が建長寺の拝観入口であり、外門と総門の間は駐車場となっているため、外部から総門にかけては、特徴的な景観は見られなかった。総門の手前から三門にかけて、三門が常に視界の中央に配されていることがわかる。景観構成比を見ると、他のエリアと比べて空の割合が特に高く、植栽の割合も高い値を示している。空は画面上部半分を占め、左右に中遠景の緑も望める。以上より、奥行きのある、開放的な空間となっていることがわかる。植栽は主にサクラで、参道の両側に燈籠が建ち、ほぼ左右対称な構成となっている。これにより、三門までの参道の軸線が際立つようになっている。参道沿いには庭石も整備されており、建長寺のエン

トランス空間として庭園広場のような空間となっている。三門に近づいていくと、徐々に視界が覆われ、門によって切り取られた次の空間が見えてくる。門を介して見える次の景、さらにその先に見える仏殿に奥行きが感じられる。三門は場と場の境界であり、次の空間への入り口となっているのである。門をくぐると、三門から仏殿の空間となる。一転して植栽は見られず、近景の緑が画面の左右7割前後を占めるようになる。これは、高さ13mにのぼる7株のビャクシンで、参道と並行に作られている長方形の囲い庭の中に植えられている。ビャクシンによって絞られた景と直線の参道と囲い庭によって、閉じた空間の中で参道の軸が強調された空間となっている。

以上の分析結果より、建長寺は、総門―三門、三門―仏殿と、異なる2つの平面空間を活かした景観構造を持っていることがわかった。総門から三門は、平坦面に建てられた歴史的建造物を中心として、その周囲にほかの景観要素が背景となり、左右の広がり外に向かう奥行きが感じられ、非常に開放的な景観となっている。左右には植栽・燈籠が配されているが、これらは約3~5mに高さが抑えられており、配置はほぼ左右対称である。その結果、三門は他の景観要素によって隠されることがなく、常に視界の中央にあり際立っている。このように、植栽のボリュームを抑えることによって中心の三門を引き立たせ、左右対称にすることによって三門までの参道の軸を強調し、宗教性を高める効果を作り出している。門を介して続く三門から仏殿は、歴史的建造物を中心に置き、ボリュームのある近景の緑を左右に配することで閉じた空間となっている。高低差はないが、左右にビャクシンを配することによって景の絞りを作り出し、中心に向かって奥行きを感じさせる効果を作り出している。配置は、総門から三門同様に、ほぼ左右対称である。ボリュームのある近景の緑を左右に配置することで軸を強化し、見え隠れと絞りの効果により人々を奥へと

誘う構成となっている。このように、ボリュームのある近景の緑による絞りと強調された軸に沿って、中央に配された仏殿へ、そして本尊である地藏菩薩へと誘っていくのである(図-6)。

次に、ルートAの景観構造を、最も伽藍が整備されていた鎌倉時代の最盛期と比較した。使用したのは、1331年に描かれたと伝えられる建長寺の伽藍指図である。伽藍の配置と大きさは、1331年当時から幾度も建て替えられているため、現在と異なっている。そこで、桜井による考察²⁶⁾と発掘調査²⁷⁾に基づき、トレースした絵図の三門から先を31度回転させ、現在の地図と重ね合わせた。そして、鎌倉期の景観構造と現在の景観構造を比較した(図-7・8)。

伽藍指図では、総門から建長寺庭園までが描かれている。現存する総門・三門・仏殿・法堂に加え、総門と三門の間の左右に東司と浴室が、三門と仏殿の間の左右には僧堂と庫裏がそれぞれ配置されており、七堂伽藍が完備されていたことがわかる。また、参道沿いには、総門から三門までに12株、三門から仏殿までに10株、計22株のビャクシンが描かれている。現在はエントランスの庭園空間となっている総門と三門の間にはビャクシンが植えられていたことがわかる。さらに、仏殿前の庭園の周囲は塀と回廊で囲まれていたことがわかった。

以上より、当時の総門から仏殿までのエリアは、近景の緑が視野を絞り、軸線を強めているという現在の三門―仏殿間と同じ景観構造が連続していたと推察された。特に、三門から仏殿までは塀と回廊で囲まれている。鎌倉末の早歌「巨山景」に「遥に入ぬる山の内、山皆(みな)寺ある寺作り、その唐国を遷し(うつし)きて、見る心地する是やこの」²⁸⁾とあるように、当時の建長寺は非常に中国的な空間構成だったという²⁹⁾。若いビャクシンに現在ほどのボリュームはなかったと考えられるが、垂直の延びるビャクシンを直線沿いに植えることで現在よりもより軸を強調した整然とした空間であったと想像される。

しかし、伽藍は火災により何度も被害にあった。再興の頻度は各伽藍により異なり、ほとんどの建築の規模が鎌倉時代から変化

図-5 ルートAにおける景観構成要素と視覚効果の変化

図-6 谷底部の景観構成

- ビャクシン
- サクラなど落葉樹林
- その他の針葉樹林
- 低木

図-7 現況参道図 2004 年

図-8 伽藍指図 1331 年
(トレースしたものを
現況地形に重ねたもの)

している。加えて、近年では発掘調査等を元に伽藍や庭園の整備が行われている。建長寺は、幾度もの再興や造成により景観構成を維持しながら、時代に合わせて景観要素を大きく変化させているのである。

(ルート B) 谷底部：山門横から唐門まで

まず景観構成要素を見てみると、12項目の中で高い割合を示したものは、空・近景の緑・歴史的建造物・参道の4つであった。中遠景の緑が常に一定の割合を示し、植栽は一部分だけ高い割合を示した。そして、高い割合を示した、空・近景の緑・歴史的建造物・中遠景の緑を折れ線グラフにして重ねてみると、空・近景の緑・歴史的建造物が、20m付近から80m付近にかけて25%前後とほぼ同じ割合を示していることがわかった(図-9)。

ルート B の書院前は、左側は近景の緑、右側は法堂と庫裏で空間が仕切れ、縦約60m幅約15mの広い広場空間となっている。右側に法堂・庫裏につながる敷石が、左側に書院につながる敷石がそれぞれ整備されている。勝上嶽の頂を中央にして書院が配置されており、敷石-唐門-書院-勝上嶽の頂が一直線上に並んでいる。書院前のどこからでも勝上嶽が望めるようになっている。参道の左側は、三門-仏殿のようにボリュームのある近景の緑と植栽で占められている。参道の右側にはなにも設置されていないため、法堂と庫裏がよく見えるようになっている。また、画面右上部を占める空と書院の奥に見える遠景の緑によって谷戸の奥行きが感じられる。以上より、ルート B は谷戸の奥行きを強調した、長方形型の広場空間となっていることがわかった(図-6)。

(ルート C) 副参道

ルート C は、塔頭・民家・グラウンド・半僧坊へと続く道である。途中で右に折れており、書院横の入り口から正統院、正統院から回春院・グラウンド・半僧坊への分岐点と2つのエリアに分けられる。沿道のひだ内には塔頭、民家、畑などが点在している。景観構成要素を見てみると、12項目のうち、高い割合を示したのは、近景の緑と参道であった。一定して多い近景の緑は、スギなどの植林や斜面の緑など種類は様々で一貫性はない。そして、書院横から正統院までは、ひだの高低差があるため植栽と崖・人工斜面が大きい割合を占め、正統院から分岐点までは、民家が多いため家屋・柵の割合が高くなっていた。しかし、ルート A のような特定の景観構造が反復するという連続した特徴は見られなかった(図-10)。以上のように、ルート C には特徴的な景観構造の特徴は見られなかった。書院裏は、16世紀まで広大な池のある庭園空間だったことから、昔は開放的な空間だったと考えられる。しかし、江戸時代に庭園が縮小されて様々な施設が進入したため、現在の民家や近景の緑の多い集落のような景観構成になった。³⁰⁾

ルート C から分岐する塔頭の小空間へ続く階段では、近景の緑・階段・門からなるランドスケープ・ユニットが見られた。平面構造分析で述べたように、平坦な谷底部と異なり、塔頭の小空間は地形の高低差を利用して造成されている。そして、各塔頭は門・本殿・庫裏で構成されており、パブリックな参道と階段でつないでいる。左右に植えられている近景の緑は、スギなどの針葉樹林である。垂直に伸びる針葉樹林を左右に整列させることで軸を強調し、垂直に高く参道を囲むことで空間を閉じる効果がある。そして、地形の高低差と左右の針葉樹林を用いて、小空間内を人の視覚から隠すことによって、修行・生活空間とパブリック空間の境界を明確にし、プライベートな空間を保っている。門前と副参道は、各塔頭を結ぶアプローチ道であると共に、江戸時代から民家や商業施設が並んでいた公共空間である。人が多数往来する中で、ランドスケープ・ユニットを各塔頭に導入することによって、俗世との境界線を明確にしているのである(図-11・12)。

図-9 ルート B における景観構成要素と視覚効果の変化

図-10 ルート C における景観構成比の変化

図-11 塔頭における視覚効果の変化

図-12 塔頭の景観構成

4. まとめ

以上より、建長寺の谷戸の景観には以下に示す6つの景観構成があることがわかった。

1. 建長寺は、小流域が宗教空間の領域となっている。
2. 建長寺の歴史的な谷戸空間は、七堂伽藍の空間、奥の空間、門前空間の3つのエリアに分けられる。
3. 七堂伽藍のある空間は、谷戸の平坦な谷底部に位置しており、門前空間は俗世からの境界となっている。
 - (i) 入り口である総門から三門は、周囲の植栽のボリュームを抑え、奥行きのある開放的な空間とすることで中心の三門を際立たせる景観構造となっている。
 - (ii) 三門から仏殿は、ボリュームのある近景の緑で景が絞られ、左右対称な構成で軸を強化している。その先の仏殿と参拝対象である本尊へ導く期待感を高める効果を生み出している。
 - (iii) 書院前の空間は、書院の背後にある勝上嶽の頂を常に視界

の中心に見えるように据え、谷戸の奥行きと谷底部の広さを強調する景観構造となっている。

このように、狭い谷戸の中で異なる3つの景観構造を用い、奥へと続く宗教空間の期待感を高めている。

4. 奥の空間は、時代と共に空間の持つ意味が最も変化した空間である。創建当初から墓所としての塔頭が創建され、僧の生活の場として地形を活かした小空間を作り上げた。16世紀までは広大な池を持つ庭園空間を有していたが、時代の流れと共に宅地・教育施設などの施設が入り込み、現在は様々な土地利用が混在化する空間となっている。

5. 門前空間は、旧街道が通るパブリック空間である。建長寺の中心部が衰退すると俗世との境界が薄れ、塔頭の開発が門前まで進出し、建長寺の宗教空間が染み出した。現在は宅地化が進み、派生するひだ内にある塔頭と民家や商業施設が混在している。

6. 塔頭の小空間は、階段・近景の緑・門によるランドスケープ・ユニットが導入されている。さらに、パブリックな参道とそこから分岐する小空間は、地形の高低差を活かし、参道からの視界を限定することで俗世界との領域の違いを明確にし、狭い谷戸の中でプライベートな空間を作り上げている。

以上のように、建長寺の谷戸は、小流域を中心とした重層的な空間構造を持ち、奥行きのある多様な宗教空間を創りあげている。限定された領域に、上に示した6つの景観構成手法が密接に関係しあい、エリアごとに内在する宗教性を体現する景観構造を作り出している。先行研究の円覚寺の谷戸と比較してみると、共通点としては、①谷戸の地形そのものが重層的な景観構造の枠組みを構成している点、②七堂伽藍の空間と塔頭の景観構成が基本的に同じである点が挙げられる。相違点としては、③奥の空間が円覚寺では僧の生活・修行の場として継承されているのに対し、建長寺では時代の変化の中で様々な土地利用が混在する空間となっている点、④建長寺では門前空間に宗教空間が染み出しているが、宗教空間としての特色が希薄になっている点が挙げられる。

以上のように、円覚寺・建長寺の宗教空間では、領域を規定する地形構造とコアとなる七堂伽藍の構成が、時代の変化に対して永続的に維持されてきたことがわかった。さらに、これらを支える景観構成とシーケンスは、地形条件が異なっても同様の目的と効果を有し、宗教空間へ人々を誘導している。一方で、

奥の空間と門前空間における私的土地所有による谷戸の細分化と無原則な開発については谷戸ごとに状況が異なっている。一連の学術研究の成果を踏まえた景観構造の原則などを踏まえ、適切な景観計画を策定していくことが今後の課題と考えられる。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、建長寺法務部長田原氏、鎌倉国宝館の皆様には多くの御協力を頂きました。皆様に厚く御礼申し上げます。

補注及び引用文献

- 1) 竹内・藤本・三橋(1995): シークエンス景観と連続シーン景観の評価構造分析 農山村地域における景観評価に関する研究 その1: 日本建築学会計画系論文第475号, 119-128
- 2) 船越・積田(1988): 参道空間の分節と空間構成要素の分析(分節点分析・物質量分析) 一参道空間の研究(その1): 日本建築学会計画系論文報告集第384号, 53-62
- 3) 片山 律(1993): 歴史的都市における都市景観評価と計画手法に関する研究: 第28回日本都市計画学会学術研究論文集, 547-551
- 4) 片山 律(1995): 歴史的都市における都市景観評価と計画手法に関する研究: 第30回日本都市計画学会学術研究論文集, 259-263
- 5) 片山 律(1997): 歴史的都市における都市景観評価と計画手法に関する研究: 第32回日本都市計画学会学術研究論文集, 25-31
- 6) 鎌倉市文化財総合目録編さん委員会(1987): 鎌倉市文化財総合目録 建造物篇: 同朋舎出版, 858pp
- 7) 鎌倉市史編纂委員会(1958): 鎌倉市史 社寺編: 吉川弘文館, 472pp
- 8) 大澤・山下・森・石川(2003): 鎌倉市を事例とした市域スケールでのビオトープ地図の作成: ランドスケープ研究 67(5): 日本造園学会, 581-586
- 9) 高橋・石川(2003): 円覚寺に見る古都鎌倉における谷戸空間の景観構造に関する研究: ランドスケープ研究 67(5): 日本造園学会, 659-664
- 10) 高木宗監(1989): 建長寺史: 大本山建長寺, 700pp
- 11) 滝澤・宮田(2003): 史跡建長寺境内 得月楼(客殿)建設に伴う発掘調査報告書遺構編: 鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団・(株)博通, 209pp
- 12) 滝澤品子(2003): 史跡建長寺境内 下水道敷設に伴うトレンチ調査報告書: 鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団・(株)博通, 106pp
- 13) 三浦彩子(2002): 建長寺蔵『龍王殿再建日記』に見る江戸期作庭の実証的研究: 日本建築学会計画系論文第559号, 263-268
- 14) 宮内・田畑(2002): 遺存植物体の分析に基づく鎌倉期建長寺庭園の植栽に関する考察: ランドスケープ研究 65, 431-434
- 15) 櫻井敏雄(1985): 建長寺伽藍の設計計画について: 日本建築学会計画系論文報告集第350号, 95-104
- 16) 高橋・石川(2003): 円覚寺に見る古都鎌倉における谷戸空間の景観構造に関する研究: ランドスケープ研究 67(5), 659-664
- 17) 高橋・石川(2003): 円覚寺に見る古都鎌倉における谷戸空間の景観構造に関する研究: ランドスケープ研究 67(5), 659-664に基づき表1を作成。
- 18) 鎌倉市史編纂委員会(1958): 鎌倉市史 社寺編: 吉川弘文館, 472pp
- 19) 滝澤・宮田(2003): 史跡建長寺境内 得月楼(客殿)建設に伴う発掘調査報告書遺構編: 鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団・(株)博通, 209pp
- 20) 大本山建長寺(1999): 建長寺: 大本山建長寺, 69pp
- 21) 補注8) 史跡建長寺境内の添付資料を参照
- 22) 建長寺から提供していただいた現物の写真を参照
- 23) 滝澤・宮田(2003): 史跡建長寺境内 得月楼(客殿)建設に伴う発掘調査報告書遺構編: 鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団・(株)博通, 209pp
- 24) 玉村竹二(1983): 扶桑五山記三 建長寺: 片岡英二, 110-130
- 25) 国土地理調査研究会編(1992): 土地・水情報の基礎と応用: 古今書院, 300pp
- 26) 櫻井敏雄(1985): 建長寺伽藍の設計計画について: 日本建築学会計画系論文報告集第350号, 95-104
- 27) 滝澤・宮田(2003): 史跡建長寺境内 得月楼(客殿)建設に伴う発掘調査報告書遺構編: 鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団・(株)博通, 209pp
- 28) 外山久江(1993): 早歌全詩集: 三弥井書店, 360pp
- 29) 三山進(1988): 図説日本の仏教4 鎌倉仏教: 新潮社, 381pp
- 30) 滝澤・宮田(2003): 史跡建長寺境内 得月楼(客殿)建設に伴う発掘調査報告書遺構編: 鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団・(株)博通, 209pp

図-13 建長寺の景観構造